

Contents

- 02 目次
プロローグ Vol. 29
- 04 特集 地球ギャラリー
写真で旅する世界
～ファインダー越しの途上国～
 - 04 12年越しの結婚式 ウガンダ 桜木 奈央子
 - 10 取り残された村 パキスタン 清水 匡
 - 14 ポジティブのすすめ ケニア 渋谷 敦志
 - 18 彼の人生、彼の夢 バングラデシュ 吉田 亮人
 - 22 「地球ギャラリー」の特設サイトがオープン!
 - 24 「輪になって語ろう。地球の未来。EARTH CAMP」イベントレポート
一枚の写真が開く世界の扉
 - 26 世界の課題 表現してみよう!
JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト
国際協力まんが大賞
ビデオブログコンテスト
アバター/デジタル漫画コンテスト
- 30 JICA海外協力隊がゆく Vol. 28
東ティモール
- 32 ザ・研修⑮
仲間とともに研修の成果を深める
- 34 教えて! 外務省
知っておきたい国際協力⑩
- 36 JICAカレンダー
- 37 information
- 38 広報室から、プレゼントほか
- 39 JICA PRESS
- 40 わたしが見つけたSDGs Vol.30

*掲載されている情報は取材当時のものです。



これまでに全149回の連載を数える「地球ギャラリー」。途上国に暮らす人々の姿をありのままに伝える写真家の思いが詰まっている。



信頼で世界をつなぐ
Leading the world with trust

プロローグ Vol. 29

考えを言葉に換える 大切さについて

文・ヤマザキマリ

私がイタリアに暮らし始めたのは10代の半ばで、その後イタリア人と家族を持ち、コロナ禍によって日本で足止めになるまではイタリアと日本を短いスパンで往復する暮らしを続けてきました。イタリアと日本というふたつの国は、南北に細長い火山列島という地理的な意味でも、職人気質の人が多いという意味でも、そしてそのほかにもさまざまな相似点があります。長い間この国との行き来をくり返す中で意識の切り替えが必要なのは、家族や社会における人々との接し方です。

日本では基本的に思ったことを何でも口にするのは美德とされています。何か思うことがあっても言葉にすぐには変換せず、耐えられそうな案件であればじっと我慢する。男女の喧嘩など見ていると、日本の女性は怒ると相手の男性といつまでも口をきかなくなる、という態度を取りますが、あのような態度はイタリア人にはめつたに見られませんか。納得がいこうといくまいと、とりあえずは険悪な空気の淀んだ空間からは一緒に出て行く。彼らにとって喧嘩は一つのコミュニケーションの形態であり、おたがい熱りが冷めるまで感じたこと、言いたいことをぶつけ合うのは当たり前なのです。

イタリアでの暮らしを始めた直後、初めてイタリア人男女の喧嘩を間近に見たときはその身振りと言葉の激しさに愕然としてしまいました。しばらくすると、イタリアではつきりと思表示をしなければ、円滑な社会生活を送っていけないということに気づかされました。黙っていることがなんの解決策にもならないのです。だから、喧嘩も彼らにとってはおたがいの意見の齟齬を理解するための手段の一つであり、面倒だし嫌な気持ちにはなるけれど、避けて通ろうとする人はいません。私と夫の喧嘩もそうですが、燻ったまま終わっても15分後には「もうやめよう。平和第一」と握手を交わします。感じたこと、思ったことは言葉で言い表さず、不穏な感懐をため込んでいくのは

自分のメンタル面での健康にはよくない、という信念のようなものがあるのでしょうか。

かたや日本では逆に、思ったことすべてを言語化することは人としての礼儀に欠くこと、ととらえられている節があります。愛情表現や褒め言葉もそうですが、近い人ほど言葉にはせず相手に察してもらうという独特のコミュニケーションが定着しています。できればあまり激しい感情や動揺、そして失意や絶望とは向き合いたくない、と身構えている人がこの国には多いように感じますが、それもまた島国という土壌の日本が長い年月をかけて、国民性や社会になじむ方便として培ってきたことなのかもしれません。

でも、精神というのはさまざまな感情を抱くという経験を怠ると脆弱になってしまいます。人によってはそれをドキュメンタリーのような映像にしたり、写真にしたり、文章に換えたりすることで、人々に向けて発信していますが、そういった表現をすることも、そして受け入れることも、私たち人間にとって欠かしてはならない授業なのではないかと思えます。いじめのような阻害行為も、クーデターや紛争も、根幹にあるのは自分たちの思い通りにならない社会や人への不平不満です。でも、さまざまな人々とたくさんコミュニケーションを積み重ね、知らないことを積極的に受け入れ、あらゆる情報から目をそらすずに向き合うことは、われわれ人間が地球という惑星で生きていくうえで避けてはならない、人類の成熟への大事なプロセスだと思っています。



イラスト●中村知史

ヤマザキマリ

漫画家・文筆家。東京造形大学客員教授。1967年東京都生まれ。84年に渡伊、フィレンツェ国立アカデミア美術学院で美術史・油絵を専攻。その後エジプト、シリア、ポルトガル、アメリカ、イタリアなどさまざまな国で生活を体験。2010年「テルマエ・ロマエ」で第3回マンガ大賞受賞、第14回手塚治虫文化賞短編賞受賞。15年度芸術選奨文部科学大臣賞新人賞受賞。17年、イタリア共和国星勳章コマンドーレ授章。